絵画指導における課題と自由

保育効果の研究(中)

村山貞雄　多田淑子
高橋種昭　植松治子
日名子太郎

〈一、保育における絵の導き方〉

一斉保育と自由保育で問題になるものの一つに、課題画と自由画の問題がある。

わが国の中世や江戸時代の絵の教え方をみると、一つの型をめざして教育し、この型に達した後にはじめて被教育者の自由な飛躍が許されている。これは絵の教育だけでなく、書道などの芸能教育や武術の教育にも共通する一般的な方法であった。

このような考え方が近代の集団保育でおこなわれる場合どうしても課題画の方向をたどることになり一斉保育がおこなわれやすい。

これにたいして起こった自由画の考え方は、自由遊びを重んじるアメリカやわが国の幼稚園教育の重要なカリキュラムとなった。自由画はペスタロッチやフレーベルの考えた内的な心の発達を助長する意味で、大切な保育内容であるだけでなく、ペスタロッチの測量術やフレーベルの考え方にはみられないような、自由保育のチャンピオンであり、幼児の興味を重視する新教育の精華である。

新教育の考え方の最もすぐれた実践者であるわが国の幼稚園や保育所では、たしかに自由画が重んじられているが、まだ課題画の考えがなくなったわけでなく、自由画と課題画のあいだには種々の問題が横たわっている。(幼児の教育三十四年十二月号参照)

〈二、課題画と自由画の効果〉

以上のように課題画と自由画のあいだには、問題があるので、幼稚園や保育所で果して課題形式で一斉に指導するのが効果的か自由形式で幼児の興味に即して指導するのが効果的かを実験的にしらべてみた。その結果は、つぎに述べるように生活指導や劇の指導の場合と似た傾向があらわれている。

この調査の信頼度は、実験に参加した幼稚園で途中から実験を放棄したところが出たため、はじめの計画にくらべて集まった資料がずっと少なくなった。

もう少し資料が多く集まっていたらおもしろい結果がでるのではないかと推測される。すなわち、方法論として一応無理がないように思われた。(日本保育学会第十二回大会発表要項　七九～八三頁参照)

実験の結果得た幼児ひとりひとりの絵について七名の教育者、心理学者、画家に、実験のはじめに描いたものとおわりに描いたものに対する評価を依頼し、各評価者の評価点がおわりの方が高いものを＋（プラス）、同じものを0（ゼロ）、低いものを－（マイナス）とし、評価者七名の結果が＋（プラス）にかたよっているものは客観的にみても効果があったものとみなし、－（マイナス）にかたよっているものは逆の効果があったものとみなし、＋・－（プラスマイナス）が同数または0（ゼロ）の多いものは変化がなかったものとみなして三段階に分けて効果のあらわれ方を検討した。その結果、つぎのような結論を得た。

全体の傾向

課題形式による指導と自由形式による絵の指導は、種々の条件をぬきにしてみた場合、効果に差があらわれない。（日本保育学会第十二回大会発表要項八三頁(1)表参照）

すなわち実験した二つのグループをあわせてみると、効果があったものは十九％、逆の効果があったものは十八％で、全体的にみたときは絵画指導は一方では効果をあげるが一方では同じ割合で逆効果があらわれているともいえる。

二つのグループの間で、効果があったものとそうでないもの、逆効果があったものとそうでないものの割合の差をしらべてみると第一表のようになる。効果があったものの割合には余りちがいがみられないが、逆効果があったものの割合は課題形式で指導したグループの方が大きい。

統計的には有意なものではないが、自由形式での指導の方が全体的には弊害が少ないといえる。

課題画を描かせる場合の効果の傾向

課題形式で指導した場合と自由形式で指導した場合、どちらがすぐれた課題画が描けるようになるだろうか。たとえば、課題形式で指導した方がよい課題画が描けるようになるのでなかろうか。このことについて調査した結果、かえって自由形式で指導してきたグループの方が、半年後に描かせた課題画によいものが多くなっている。（日本保育学会第十二回大会発表要項　八四頁(2)表参照）

すなわち課題形式のグループと自由形式のグループに半年の指導の前後に課題として「お母さん」の絵を描かせ、その結果、効果があったものとそうでないもの、逆効果があったものとそうでないものの割合の差をしらべてみると第二表のようになる。効果のあったものは自由形式で指導したグループにやや多く、逆効果は課題形式で指導したグループに多い。

そこで統計的な有意性はうすいが課題画を描かせる場合、自由形式より課題形式で指導したグループに前よりよくない絵がふえているといえる。

第一表　全体的な効果の傾向

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	8 (18%)	9 (20%)	17
そうでないもの	37	36	73
計	45	45	90

$\lambda^2=0$　　$p=0$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	10 (22%)	6 (13%)	16
そうでないもの	35	39	74
計	45	45	90

$\lambda^2=0.585$　　$p=0.50$

自由画を描かせる場合の効果の傾向

課題形式で指導した場合と自由形式で指導した場合、どちらがすぐれた自由画が描けるようになるだろうか。たとえば、自由形式で指導した方がよい自由画が描けるようになるのではなかろうか。このことについても統計をとったところ、二つのグループでの効果のあらわれ方の差の有意性は低く確かな結論は得られない。（日本保育学会第十二回大会発表要項八四頁 (3)表参照）

すなわち、課題形式のグループと自由形式のグループに半年の指導の前後に自由画として「何でも好きなもの」を描かせ、その結果、効果があったものとそうでないもの、逆効果があったものとそうでないものの割合の差をしらべたところ、第三表のようで、ほとんどちがいがみられない。

第二表　画題と効果の傾向（課題画をかかせた場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	1 (5%)	4 (18%)	5
そうでないもの	21	18	39
計	22	22	44

$\lambda^2=0.225$　$p=0.70$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	8 (36%)	2 (99%)	10
そうでないもの	14	20	34
計	22	22	44

$\lambda^2=0.714$　$\lambda=0.50$

第三表　画題と効果の傾向（自由画をかかせた場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	7 (30%)	5 (22%)	12
そうでないもの	16	18	34
計	23	23	46

$\lambda^2=0.112$　$p=0.80$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	2 (9%)	4 (17%)	6
そうでないもの	21	19	40
計	23	23	46

$\lambda^2=0.191$　$p=0.70$

ただし、自由形式のグループでは、課題画を描かせた場合よくなったものが18%、自由画を描かせた場合よくなったものが22%でどちらも同じような結果なのにたいして、課題形式グループでは、課題画を描かせた場合よくなったものが5%、自由画を描かせた場合よくなったものが30%あり、自由画を描かせた場合の方がずっと多い。

課題形式のグループでは、(1)いつも課題画を描かされていて、自由画を描きたい意欲が強い。(2)自由形式のグループより描画指導が強制的ではあるが基礎的な技術の訓練もよくされている。という点から自由画によい絵が生まれるのではないかとも考えられる。

性別による効果の傾向

課題形式で指導する場合と自由形式で指導する場合、両者のあいだに男女別の効果の差があらわれないだろうか。これについての統計的結果は第四表のようである。

男の子の場合、課題形式のグループと自由形式のグループのあいだで効果があったものの割合は大体同じであるが、逆効果があったものの割合をみると課題形式のグループの方が大きい。統計的にも効果があったものの割合は、（その差の有意性が水準90%）ほとんど同じであるのに、逆効果のものの割合の差の有意性は、水準30%でありその傾向が裏づけされている。

男の子の場合は、課題形式による指導はあまり効果的でないということがいえるのではなかろうか。

つぎに、女の子の場合、課題形式のグループも自由形式のグルー

プも、効果があったものと逆効果があったものの割合がまったく同じで、二つのグループのあいだの差の有意性も低く、効果のあらわれ方は同じであるといえる。

女の子の場合は、課題形式で指導しても、自由形式で指導しても効果に変わりがなく、どちらでもよいということが言えるのではなかろうか。

以上の結果、女の子は、課題形式でも自由形式でもその指導の効果にあまり差がないが、男の子は、課題形式で指導すること、すなわち一斉に形式的に指導する方法は不向きであり、自発的な方法、すなわち自由形式で指導する方がよいということが言えそうである。そしてこのことは、十二月号の生活指導などの場合も大体同じようなことが言えていたわけである。

第四表　性別と効果の傾向（男の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	5 (20%)	5 (23%)	10
そうでないもの	20	17	37
計	25	22	47

$\lambda^2=0.019$　$p=0.90$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	7 (28%)	2 (9%)	9
そうでないもの	18	20	38
計	25	22	47

$\lambda^2=1.296$　$p=0.30$

性別と効果の傾向（女の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	3 (15%)	4 (17%)	7
そうでないもの	17	19	36
計	20	23	47

$\lambda^2=0.040$　$p=0.90$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	3 (15%)	4 (17%)	7
そうでないもの	17	19	36
計	20	23	43

$\lambda^2=0.040$　$\lambda=0.90$

第五表　知能と効果の傾向（課題形式の場合）

課グループ	IQ129以下	IQ130以上	計
効果があったもの	1	3	4
そうでないもの	26	7	33
計	27	10	37

$\lambda^2=2.860$　$p=0.10$

課グループ	IQ129以下	IQ130以上	計
逆の効果があったもの	5	1	6
そうでないもの	22	9	31
計	27	10	37

$\lambda^2=0.014$　$p=0.95$

知能と効果の傾向（自由形式の場合）

自グループ	IQ129以下	IQ130以上	計
効果があったもの	8	2	10
そうでないもの	19	8	27
計	27	10	37

$\lambda^2=0.028$　$p=0.90$

自グループ	IQ129以下	IQ130以上	計
逆の効果があったもの	5	2	7
そうでないもの	22	8	30
計	27	10	37

$\lambda^2=0.308$　$p=0.70$

知能の高さと効果の傾向

知能の高いものとそうでないものとに分けて考えた場合第五表のような結果を得た。この表は数が極めて少なくはっきりしたことはなにも言えないが、大体の傾向としては知能の高いものは課題形式で指導した方にややよい結果がみられ、そうでないものは自由形式で指導した方に効果があるように思われる。

生活指導においても、主古年令の小さな

ものや知能指数の低いものには、自発性にまって指導した方がやや効果的だったのに似ている。

描画態度における効果の傾向

子どもの描画態度が、課題形式による指導と自由形式による指導でどのように変わってくるかをみるために、家庭で描く態度と幼稚園で描く態度に分けて考えてみた。（日本保育学会第十二回発表要項参照）

第六表　家庭での描画態度（全体）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	1	11	12
そうでないもの	20	14	34
計	21	25	46

$\lambda^2=7.191$　$p=0.01$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	5	4	12
そうでないもの	16	21	34
計	21	25	46

$\lambda^2=0.085$　$p=0.80$

家庭での描画態度（男の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	1	4	5
そうでないもの	9	8	17
計	10	12	22

$\lambda^2=0.623$　$p=0.50$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	1	3	4
そうでないもの	9	9	18
計	10	12	22

$\lambda^2=0.124$　$p=0.80$

家庭での描画態度（女の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	0	7	7
そうでないもの	11	6	17
計	11	13	24

$\lambda^2=5.958$　$p=0.02$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	4	1	5
そうでないもの	7	12	19
計	11	13	24

$\lambda^2=1.315$　$p=0.30$

まず、母親の記録によって子どもが家庭で絵を描く態度をみたところ、第六表のようになって、自由形式で指導した方に態度がよくなったものが多くあらわれている。統計的にも二つのグループのあいだの効果の差の有意性は水準で相当高い。

指導法による家での描画態度の変化のちがいは、男女別で考えるとどうであろう。

男の子は二つのグループでそれぞれよくなったものと悪くなったものの割合がほぼ等しいが、女の子は、課題形式のグループでは悪くなったものの方が多く、自由形式のグループではよくなったものの方が多い。とくに自由形式のグループで悪くなったものが、13人中1人であるのにくらべて、よくなったものが13人中7人で半数以上を占めている。

女の子の場合、二つのグループのあいだで、描かせた画そのものにみられる効果の差はあまり明らかでないが、家庭での描く態度にみられる効果の差は男の子より明らかであるといえる。

幼稚園での描画態度は先生の記録によった。先生が態度がわるくなったものとしてあげたのは、58人中1人だけで、家庭での描画態度の記録で母親が46人中9人あげているのにくらべて大分少ない。

第七表　幼稚園での描画態度（全体）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	15	10	25
そうでないもの	15	18	33
計	30	28	58

$\lambda^2=0.692$　　$p=0.50$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	0	1	1
そうでないもの	30	27	57
計	30	28	58

$\lambda^2=0.001$　　$p=0.98$

幼稚園での描画態度（男の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	7	7	14
そうでないもの	9	8	17
計	16	15	31

$\lambda^2=0.039$　　$p=0.90$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	0	0	0
そうでないもの	16	15	31
計	16	15	31

$\lambda^2=0$　　$p=0$

幼稚園での描画態度（女の子の場合）

	課グループ	自グループ	計
効果があったもの	8 57	3 23	11
そうでないもの	6	10	16
計	14	13	27

$\lambda^2=1.982$　　$p=0.20$

	課グループ	自グループ	計
逆の効果があったもの	0 0	1 8	1
そうでないもの	14	12	26
計	14	13	27

$\lambda^2=0.001$　　$p=0.98$

（第七号参照）

幼稚園での描画態度がよくなったものは、課題形式によるグループにやや多いが統計的な有意性はない。男女別でみると、家庭での描画態度の変化と同じように男の子は二つのグループでの差がほとんどみられない。女の子は課題形式にややよい結果がみられる。これは、家庭での描画態度の自由形式のグループによい結果がみられているのと対称的である。

三、今後の課題

以上の調査結果によると、自由画がよいか課題画がよいかについては、一方的な結論をくだしえず、両方ともそれぞれ長所をもっていることになる。絵の指導といっても、その目的として、幼児の心の発達、描画の技術、観察力、色彩や美醜にたいする判別力など多様な内容が含まれている。このような単一でない目的にたいして、自由画と課題画の両者を併用しその長所を発揮させることが望ましいということは一応うなずけることである。

それだけでなく、以上の調査でもみられたように男女その他個人差によっても、自由画と課題画のあいだの効果に差があるので、各幼児にたいして両方の長所を巧みに使い分けることが大切になる。

そしてこのような方法をとるとき、最も問題になるのは、ひとりの子どもに描画という一つの内容にたいして同時期に異なった教育方法をとることによって起こる混乱である。この混乱を防いで、両者をスムーズに関連させるための努力が必要になるが、この解決はさして困難でないと思われる。なおこの調査では幼児の年齢による変化が出ていないが、これも残された問題であろう。